
大学と地域博物館の連携による 文化財の保存・活用に関する研究

見 田 隆 鑑

はじめに

筆者は令和元年度椋山女学園大学学園研究費助成金（B）を受け、「地域博物館との連携による文化財の保存と活用に関する研究」（研究代表者：見田隆鑑）という研究課題に取り組み、令和3年度にも同助成金（B）を受け、「大学と地域が連携した文化財の保存・活用事業に関する実践的研究」（研究代表者：見田隆鑑、研究分担者：柘窪優二）という研究課題に取り組んだ。それぞれについての簡単な研究成果報告書は公開されている¹⁾が、本稿では各研究課題で行った具体的な内容や研究成果を整理し、報告する。本文中では特に令和元年度の研究課題を研究①、令和3年度の研究課題を研究②と表記する。

1. 研究背景と目的

本研究は、大学と地域の博物館や寺院が連携して地域の文化財に関する調査や撮影を実施し、その成果を社会へ発信するとともに、博物館における展示、教育普及活動の活性化、地域における文化財の活用の活性化を目指すものである。文化財が地域振興や観光振興を通じて、地方創生や地域活性化に貢献している側面がある一方で、地域の文化財を保存・継承する担い手の不足や文化行政の予算削減、専門的な人材不足や文化財の相次ぐ

盗難や未曾有の災害など、文化財の保存・活用は様々な課題も抱えている。

こうした中、本研究は大学と地域の博物館や行政、文化財を所有する寺院が連携して文化財調査を行い、更には文化財に関する情報発信を行うことを通して、地域に伝わる文化財の保存と活用の促進を目指すものである。本研究を通して、大学側は博物館の仲介のもとで地域の文化財調査、映像記録の制作に関わる機会を獲得し、その成果を所蔵者や博物館等に提供することで、文化財が持つ情報が地域へと還元され、博物館や地域の活動の活性化に役立ててもらうことが可能となると考えた。

今回、研究①で連携を図った博物館は一宮市博物館で、博物館に隣接する臨済宗妙心寺派の寺院、妙興報恩禅寺（以下、妙興寺）の未指定の仏像の調査や仏画、禅僧の墨蹟等のデジタル化を中心に作業を進めた。

また、研究②は、研究①のように特定の寺院における文化財のアーカイブを対象にしたものではないが、地域に伝わる仏像の映像記録の制作とインターネットでの配信を中心に、大学と地域が連携した形での文化財の保存・活用事業の活性化を目指した。また研究②では映像制作やナレーションに学生が参加して情報発信を行うことで、若い世代にも地域の文化財について関心を持ってもらえることを期待した。

研究②で連携を図ったのは、博物館では蟹江町歴史民俗資料館で、蟹江山常楽寺龍照院（以下、龍照院）の仏像の映像記録の制作とYouTube及び

筆者が管理する「地域文化・仏像バーチャルミュージアム」のホームページでの映像配信を行った。また、博物館との連携ではないが、名古屋市昭和区にある八事山興正寺（以下、興正寺）の銅造大日如来坐像（2軀）の映像記録も制作し、先の龍照院と同じ形で映像配信を行った。研究②で行った映像記録の制作と公開では、共同研究者である柘窪優二氏（椋山女学園大学文化情報学部教授）及び柘窪ゼミの学生たちの協力を得た。

本研究での調査や撮影を通して得られた文化財のデータ及び映像記録などの成果物は、地域及び所蔵者に還元し、地域の博物館や文化財関係部署、寺院で今後活用を図ってもらえるようにした。以下にそれぞれの内容等について報告する。

2. 研究①：一宮市・妙興寺所蔵の 仏像・仏画の調査に関する報告

妙興寺の文化財に関しては、本研究より先に妙興寺の仏像及び肖像彫刻の映像記録の制作に関わりを持っており、その際にも妙興寺執事小川国夫氏、一宮市博物館及び同館学芸員の石黒智教氏、妙興寺の塔頭・來薰院住職の平松良順氏を中心に仲介をして頂いており、妙興寺住職の稲垣宗久氏のご理解を頂き映像記録の制作と公開を行うことができた。本研究もその流れの中で進められた形である。妙興寺における映像記録の制作については既に報告している²⁾が、(1)仏殿の釈迦三尊像、(2)開山堂の大照禪師坐像、大応国師坐像、(3)方丈の如意輪観音菩薩坐像、(4)勅使門、三門と三門楼上の仏像、(5)仏殿の妙興寺創建以前の仏像（天部像）の他、妙興寺の塔頭寺院である來薰院の聖観音菩薩坐像、耕雲院の大日如来坐像と不動明王立像の計8本の映像記録を制作し、公開している。

2-1. 妙興寺所蔵「絹本著色仏涅槃図」の デジタル化

妙興寺が所蔵する「絹本著色仏涅槃図」（鎌倉

時代、重要文化財）【図版1】は、縦332.6cm、横290.2cmという全国的にも規模の大きな涅槃図で、制作当初は京都の泉涌寺にあり、室町時代中期以降は妙興寺に伝わっていたことが墨書や室町時代の本図の由来と修理記録・奉加者を書いた紙などの情報から確認できる作品である。本作品のカラー図版や解説は『愛知県史 別編 文化財2 絵画』に収録される渡邊里志氏の作品解説が詳しい³⁾。

本作品は、令和元（2019）年5月24日から26日までの3日間、一宮市博物館で公開された⁴⁾が、本作品が重要文化財であることや、その保存状態から長期間展示することが難しい作品である。本作品については、これまで表装を含めた全体図や本紙の全体図については十分な写真撮影が行われていないということであった為、本作品の高精細なデジタルデータを記録して後世に残すこと、またそのデータは単なる記録写真ではなく、本作品のレプリカを制作する際や博物館での展示及び教育普及活動での利用に資する形での記録を行うことを目標とした。

ただし、本作品の保存状態から懸けた状態で撮影することは作品自体に負荷をかけることから、作品を床に広げ、天井から全体像を撮影すること



【撮影スタジオの様子】

が可能なスタジオを有し、また撮影者も文化財の撮影に経験豊かなカメラマンである必要があることから、過去に筆者が関係した愛知県豊田市や同・知立市の市史編さん事業で文化財の撮影を担当し、現場での作業を通して面識のあったアイランドスタジオの山木田時夫氏に依頼することにした。

撮影にあたっては一宮市博物館から名古屋市内にあるスタジオまでの往復移動が必要になることから、一宮市博物館学芸員の石黒智教氏に移動を伴う撮影にあたっての諸手続や日本通運の美術輸送の手配を依頼し、博物館とスタジオ間の輸送を含め、終日撮影に立ち会って頂いた。

撮影は【図版1】のような本作品全体の1カットだけではなく、全体を4分割と9分割で撮影し、それらのデータを繋ぐことで縦3メートルを超える大幅のレプリカ制作にも耐えるデータを記録した。撮影したデータは、所蔵者である妙興寺とともに一宮市博物館に寄贈した。

2-2. 妙興寺所蔵の仏像（未指定）に関する調査と撮影



【彫刻作品の撮影風景】

妙興寺は、先に紹介した映像作品に記録した文化財指定を受けた仏像や肖像彫刻を数多く所蔵しているが、文化財指定を受けたもの以外にも未指定の仏像を所蔵している。それらの作品も可能な

限り実査を行い、基礎的なデータ及び写真データを残しておくことが必要であると考えた。

今回はそのすべてを調査・撮影できたわけではないが、(1)足利尊氏の母親（上杉清子）の念持仏とされる厨子入り観音菩薩立像（髻観音）、(2)銅造釈迦誕生仏、(3)木造南無仏太子立像、(4)木造布袋和尚坐像、(5)木造韋駄天立像の計5軀を実査し、先の「仏涅槃図」と同様に、山木田氏に撮影を依頼し、デジタルカメラで通常の文化財調査時と同様に正面、側面、背面、像底など多方向からの撮影を行った⁵⁾。ここでは各尊像の基礎情報を整理し、写真資料とともに紹介する。

(1) 厨子入り観音菩薩立像（髻観音）【図版2～5】

像高 4.3cm 一木造、素地

(形状)

宝髻をあらわし、頭飾（別製）、冠繪（別製）をあらわす。

条帛、腰布、裙を着け、両肩から天衣を垂下する。右手は屈臂して印相をあらわし、左手は屈臂して持物（蓮の茎か）を執り、蓮華座上に立つ。

頭光（輪光）とともに頭光・身光からなる二重円光をあらわす。

(品質構造)

頭頂部から台座蓮肉部分まで、天衣も含めて一材より彫出する。

冠飾、冠繪、持物（現状、蓮の葉の部分を残す）、輪光、二重円光部分は金属製。

(保存状態)

右手部分が欠損し、接着剤のようなもので補修されている。

台座の蓮弁は殆ど欠損する。

像本体と厨子・台座は時代が異なる。また、現状のガラス製の宝珠形容器は、厨子などに比してより時代の新しいものと見られる。

(備考)

本像は、寺伝では足利尊氏の母（上杉清子）が

所持した観音像で、足利義教により妙興寺に施入されたものとする。この伝承の通りであれば、鎌倉時代から室町時代初期の作品ということになるが、制作年代については検討を要し、妙興寺への施入記録など本像の来歴を裏付ける史料を確認する必要がある。また、昭和期に大淵老師〔河野宗寛氏〕(1901～1970)によって記された伝承が何を根拠に書かれたものかも検討を要する。

(2)銅造釈迦誕生仏【図版6～8】

鑄造 江戸時代

総高 15.3cm 台座幅 4.7cm

台座奥行 4.6cm

(形状)

螺髪、白毫相をあらわす。肉髻の盛り上がりはあらわさない。上半身裸形、下半身に裙を着け、右手は腕を上げ人差し指で天を差し、左手は垂下して人差し指で地を差し、円錐台形の台座上に立つ。

(保存状態)

現状、右手首先が折損し、補修されている。

(備考)

本像は現在も妙興寺で行われている仏事で使用されている。

(3)木造南無仏太子立像【図版9～12】

ヒノキ材、割矧造、漆塗 鎌倉時代後期～南北朝時代

像高 33.0cm 頭頂-顎下 7.7cm

面幅 4.8cm 面奥 6.3cm 耳張 6.6cm

肩張 9.7cm 肘張 11.3cm

胸奥(右) 5.7cm(左) 5.6cm 腹奥 6.0cm

裾張 12.3cm

台座 幅16.9cm 奥行 14.0cm 高さ 8.2cm

(形状)

円頂相、上半身裸形で、下半身に裙を着け、胸前で合掌する通形の南無仏太子像。

(品質構造)

頭体幹部は、両腕肘まで含む縦一材より彫出し、前後に割る。

前面材の面部を割り、玉眼を嵌入する。

割首とし、両肩でも割る。

合掌手をあらわす肘先は別材を矧ぐ。

両裾先に別材を矧ぐ(右裾奥部分欠失)。

(保存状態)

合掌手をあらわす肘先は後補。

右裾奥部分を欠失する。

(備考)

妙興寺は聖徳太子関係では、「絹本著色聖徳太子講讃図(勝鬘経講讃図)」(一宮市指定文化財)を所蔵する。この講讃図は南北朝時代(14世紀)頃のものと考えられている⁶⁾。

妙興寺の信仰の中に聖徳太子信仰があるのかどうかは尚検討を要するが、聖徳太子信仰に関連する彫刻と絵画が伝わる点は注目される。

一宮市内の南無仏太子像の作例には、妙興寺像の他に頓受寺(真宗大谷派)の南無仏太子像(南北朝時代、一宮市指定文化財)があるが、この像は大正15年に大阪四天王寺秋野坊所蔵のものが頓受寺へ移されたものとされる。尾張地域では稲沢市・性海寺(真言宗智山派)に鎌倉時代中期の南無仏太子像(像高50cm、愛知県指定文化財)が伝わっている。

愛知県内に視点を広げると、岡崎市・満性寺(真宗高田派)に鎌倉時代末の南無仏太子像(像高70cm、愛知県指定文化財)、半田市・雲観寺(真宗大谷派)に鎌倉時代末の南無仏太子像(像高69.2cm、半田市指定文化財)、西尾市・善福寺(真宗大谷派)に室町時代の南無仏太子像(像高50.5cm、西尾市指定文化財)、豊田市・明誓寺(真宗大谷派)に江戸時代の南無仏太子像(像高40.6cm、豊田市指定文化財)などがある。南無仏太子像については筆者自身が周辺地域の網羅的な調査を出来ているわけではないので、他にも作例があると思われるが、指定文化財になっ

ている多くの尊像が真宗寺院に安置され、尾張地域の妙興寺像と性海寺像が現在、真宗以外の寺院で南無仏太子を所蔵する事例と言える。また、サイズを概観した時、像高33cmの妙興寺像はやや小ぶりの尊像であることが分かる。

妙興寺の仏像や仏画には寺外から伝わったものもあることから、南無仏太子像もそうした尊像の一体である可能性もあるが、中世の妙興寺における聖徳太子信仰や舎利信仰の姿を伝える尊像である可能性もあるため、その来歴については今後も検討する価値がある。

(4)木造布袋和尚坐像【図版13～19】

一木造 南北朝時代～室町時代
像高 9.0cm 頭頂-顎下 5.2cm
耳張(耳朶) 5.5cm 面幅 3.4cm 面奥 4.5cm
最大幅 15.5cm 最大奥 13.2cm

(形状)

僧形。耳朵を大きくあらわし、口を少し開けて、笑みを浮かべてやや上を見上げる相貌。

肥大した体をあらわし、上衣がはだけて胸腹部が露出し、左脇に下ろした布袋にもたれかかるような形でゆったりと坐す。

(品質構造)

頭体部、膝前部分それぞれ横一材より彫出する。面部を割り、玉眼を嵌入する。

(保存状態)

鼻先、舌尖、右足先(親指、第2指)、右手指先を欠失。右手の持物を欠失。

欠失する持物は、現状柄の部分が残存することから、「扇」と思われる。

(備考)

- ・像底に大淵老師〔河野宗寛氏〕(1901～1970)によって書かれた「開山大応国師所持 布袋和尚木像」の紙が貼り付けられている。
- ・現状は座布状の台座と、方形の台座を伴う形で厨子内に納められている。方形の台座裏には、「永享五癸丑五月日回陽軒」の墨書があり、こ

の台座が室町時代の永享5年(1433)に制作された可能性があるが、この台座の天板には方形の柄穴が設けられており、この柄穴と現状、布袋坐像が置かれる座布状の台座や本体との関連性が認められないことから、台座部についてはどこかの段階で本像に転用されている可能性があり、この墨書銘を本像の制作年代と関係づける必要はないように思われる。また、墨書は2つあり、片方は文字が薄くなっていることから、現在ははっきりと読むことができる墨書は当初書かれてあった墨書を写したものと受け取れる。

- ・また、本像は南浦紹明(大応国師)〔1235～1309〕が所持したものとする伝承があり、過去の展覧会図録⁷⁾でも制作を中国・宋代としているが、本像は面部を割って玉眼を嵌入することからも日本での制作と考えた方がよいようにも思われる。ただし、国内の作例も本像以外に同時代の類例を知らず、どのような背景から本像のような小型の布袋和尚坐像が制作される必要があったのかなど検討すべき課題を残している。

(5)木造韋駄天立像【図版20～25】

ヒノキ材、寄木造、彩色 桃山時代～江戸時代
総高 66.7cm (天衣～足下)
像高 61.4cm (現状) 髪際高 57.5cm
頭頂-顎下 12.6cm (現状) 髪際-顎下 8.0cm
面幅 7.3cm 面奥 9.9cm
肘張 23.9cm 胸奥(中央) 15.0cm
腹奥 16.7cm
袖張 24.9cm 裾張 31.1cm
天衣の張 29.8cm (上部) 36.3cm (下部)
足先開(内) 10.0cm (外) 18.0cm

(形状)

獣面をあらわす兜を被り、大袖衣、袴、獣皮を着け、甲冑、籠手を身につけ、沓を履く。胸前で合掌し、金剛杵を両腕部分に懸ける形で載せる。

(品質構造)

彩色の為、詳細は不明だが、頭体幹部は前後二材矧ぎ、両袖部、両手肘先、両足先、天衣部に別材を矧ぐものと見られる。持物（金剛杵）も別材。

（保存状態）

兜頂部を欠失する。

両手肘先（合掌手）は後補。

現状、天衣は本体に釘打ちされている。

台座は後補。

両足柄のうち、左足柄は生きているが、右足柄は台座内で割損し、台座部分から突き出した柄の割損部が右足裏にささる形で自立を補助している状態である。

（備考）

韋駄天立像は、推定される制作年代からも天正18（1590）年に豊臣秀次（あるいは秀吉）によって京都・妙心寺から南化玄興（1538-1604）が招聘されて妙興寺が再興されていく時期に制作された尊像の一体かと考えられる。

2-3. 妙興寺所蔵の墨蹟のデジタル化

先の仏像の調査・撮影時に、一宮市博物館の学芸員より妙興寺が所蔵する禅僧の墨跡についても、デジタルデータを残しておきたいという要望があり、仏像の撮影と合わせて数点撮影を実施した。先の仏像とは異なり、墨蹟そのものについては調査を行う形ではなく、展覧会図録などに利用できるデジタルデータを記録することを目的とした。撮影を行った墨蹟は以下の6点である。

- | | |
|-------------|-------------|
| (1)伝法相承次第 | (2)特芳禅傑禅師墨蹟 |
| (3)峰翁祖一禅師墨蹟 | (4)妙興寺文書寄進状 |
| (5)滅宗宗興禅師墨蹟 | (6)滅宗宗興文書目録 |



【掛軸の撮影風景】

3. 研究②：蟹江山常楽寺龍照院の仏像に関する映像記録の制作と公開



研究②において、蟹江町で仏像の映像記録の制作を行った背景には、筆者が令和2年9月から蟹江町文化財保存活用地域計画作成協議会の委員を引き受けていることもあるが、龍照院の仏像の映像記録の撮影にあたっては、蟹江町歴史民俗資料館の大野麻子氏に協力を頂き、重要文化財である秘仏・木造十一面観音菩薩立像と蟹江町指定文化財である大日堂の木造大日如来坐像の映像記録の制作を行うことができた。

- (1)十一面観音菩薩立像～蟹江町・龍照院～

(4分30秒)

(2)大日如来坐像～蟹江町・龍照院～(3分15秒)⁸⁾

蟹江町にある指定文化財(彫刻)のうち、仏像は龍照院の2体の他、安楽寺の木造薬師如来立像(町指定文化財)を合わせた計3件で、まずは重要文化財を含む龍照院の仏像2体を映像記録制作の対象として選択した。撮影にあたってのコーディネーター及び撮影用の台本の制作を筆者が、撮影・編集は共同研究者である柘窪優二氏が担当し、撮影補助、ナレーション、音声には柘窪ゼミの学生が参加している。

このうち、木造大日如来坐像の映像記録についてはYouTube及び筆者が管理する「地域文化・仏像バーチャルミュージアム」というホームページ⁹⁾で一般公開した。木造十一面観音菩薩立像については映像記録は制作したが、公開過程での寺院とのやり取りの中で「秘仏」という信仰上の位置づけや、地域の人たちの信仰への配慮からYouTube等インターネット上での一般公開は避けることとなった。ただし、今後、所蔵者である寺院もしくは地域の中で限定して映像記録を活用する機会がある可能性もあることから、2体の映像記録を収録したDVDを寺院及び蟹江町歴史民俗資料館に寄贈する形を取った。

重要文化財となっている木造十一面観音菩薩立像は、過去に詳細な調査や保存修理が行われ、基本情報や図版も刊行物を通して既に報告されている¹⁰⁾が、木造大日如来坐像はこれまで十分な調査は行われておらず、過去の修理を通して尊容なども変化していることから、今回のような映像記録の制作だけでなく、今後精査及び写真撮影を行い、基本情報の取得をはじめ構造や保存状態に関する情報も整理しておく必要がある。

4. 研究②：八事山興正寺の銅造大日如来坐像(総本尊、試仏)に関する映像記録の制作と公開



興正寺(名古屋市昭和区)の銅造大日如来坐像(総本尊)の映像記録の制作は、これまで制作を行ってきた名古屋市内の仏像を記録してきた名古屋市仏像シリーズ¹¹⁾の流れに位置づけられる作品である。「名古屋三大仏」と呼ばれる仏像のうち名古屋市中区・栄国寺の木造阿弥陀如来坐像(鎌倉時代、愛知県指定文化財)、同熱田区・雲心寺の木造阿弥陀如来坐像(江戸時代、名古屋市指定文化財)は既に映像記録の制作と公開ができていたが、撮影を残していた最後の一体について今回映像記録を残すことができた。撮影した2体の銅造大日如来坐像(総本尊、試仏)はともに名古屋市指定文化財となっている。先の蟹江町・龍照院と同様に、撮影にあたってのコーディネーターおよび撮影用の台本の制作を筆者が、撮影・編集は共同研究者である柘窪優二氏が担当し、撮影補助、ナレーション、音声には柘窪ゼミの学生が参加している。

撮影にあたっては興正寺及び興正寺で文化財等を扱っている職員の方の協力を頂き、通常公開されていない総本尊の背面に刻まれた銘文(「大願主従二位権大納言/源光友朝臣/維時/元禄丁丑歳孟夏大吉祥日/當寺中興本願天瑞圓照謹銘之/娑

婆世界四天下南瞻部洲/大日本國尾陽愛知郡八事山/遍照院興正律寺本尊/大日如来」や試仏と呼ばれる総本尊制作時の雛形の姿も映像に収めて比較できるようにし、それぞれの姿を広く公開することができた。

■銅造大日如来坐像～名古屋・八事山興正寺～
(5分00秒)¹²⁾

おわりに

以上、簡潔ではあるが令和元年度と令和3年度の研究活動の内容とその成果報告をまとめた。今後の展望として、地域での文化財調査を持続的に進めていく為には、相応の予算の獲得が必要であることを感じている。特に地域に伝わる仏像の保存・活用の状況は、行政がその必要性についてどのくらい認識を持ち、予算を割り当てるかによっても取り組み方に大きな差が生まれているように思われる。

また、実際に調査等を進めていく上で、地域の博物館や文化財関係部署と文化財所有者である寺社との関係性が過去から現在に至るまでどのくらい生まれ、信頼関係が築かれているのかも極めて重要なポイントと言える。今回の研究成果も筆者ら大学サイドが直接寺院と交渉しても調査撮影や映像記録の制作・公開は不可能であったと思われ、地域の仲介者と寺院との信頼関係により実現できたものと考えている。

地域の中で文化財調査を計画的に実施し、資料写真を含めた基礎的なデータを所蔵者や周辺の博物館、行政の担当部署に残すことは非常に大切なことで、自身の他の研究活動の中でも、過去に何らかの調査が実施されていても作品に関する基本的なデータや写真が地域に残されておらず、資料の照会を行った際に過去の展覧会図録の作品解説や市町村史あるいは地域で編さんされた文化財案

内等の作品解説のコピーやPDFが提供されることがある¹³⁾。

また、地域に伝わる仏像の基礎的な調査についても、過去の郷土史編さん時に行われた調査以降は実施されていない場合もあり、デジタル化の時代となり新たに文化財関係のホームページが設けられインターネット上で紹介される場合にも過去の間違った情報がそのまま紹介欄で公開されてしまうものも見られる。また、地域の文化財の中には、専門家が調査や評価を行っていない場合もあり、文化財指定の基準や指定の根拠が不明瞭なものも見受けられ、改めて調査を実施することで過去に見落とされた優れた作品が再確認されることも多く、特に近年は仏像の盗難や未曾有の災害による被害もあることから、学術的な調査の実施は、そうした被害から地域の貴重な仏像を守る為にも大切なこととも言える。

令和5年4月1日から施行される改正博物館法では、第3条第1項第3号に博物館が行う事業として、「博物館資料に係る電磁的記録を作成し、公開すること。」が加わり、博物館に期待される役割の変化の中で、デジタルアーカイブが博物館の一つの事業として求められ、所蔵資料等のデジタル化とその公開によって、博物館資料の保存と活用を図ること、またデジタルアーカイブの活用を通して新たな知的創造へと繋げることが求められるようになる。こうした事業もすべての博物館法下にある博物館が足並みを揃えてできるものではなく、各館の事情によりその活動には差異が生まれることが予想され、博物館におけるデジタルデータの保存とその利活用やデジタルアーカイブの構築と公開に関しては、今後様々な課題が浮彫になってくるのではないかとと思われる。

今回のような大学と地域博物館あるいは地域の文化財所有者が連携して実施した調査撮影時に記録したデジタルデータが、微力ではあるものの地域博物館でのデジタルアーカイブ構築の一助になれば理想的であり、地域から発信されるデジタル

アーカイブの発展によって結果的に市町村レベルでしか知られていないような仏像の情報がより広く知られること、また検索を通して知ることができるようになることは、国内の仏像研究そのものの進展にも大きな力となるものと考えられる。

デジタルアーカイブの公開など、地域の文化財に関する情報発信を一つのプレゼンテーションとして捉えるのであれば、まずは(1)公開する側が正しい情報を発信し、その内容が利用者に正確に届くこと、その上で(2)利用者に地域に残されてきた文化財に何らかの魅力を感じてもらい、その心を動かすこと、そして(3)そのことが結果的に利用者の何らかのアクションや新しい創造へと繋がっていくことが大切であろう。その最初の部分において今後も計画的に予算を獲得しながら、大学サイドが貢献していくことができたらと考えている。

地域に伝わる文化財の積極的な活用が言われながらも、具体的にどのような形で活用を図ればよいか、文化財の持つ情報を広く発信する場合にも何をどのような形で発信すればよいかといった課題を担当部署が抱えているケースもあるが、文化財を地域へのインバウンドを期待した文化資源や観光資源として活かすことだけを重視するのではなく、今後は文化財を通して地域の人たちが身近な地域の歴史・文化を知り、自分たちが住む地域に誇りを持つことができる機会を作ること、地域の歴史・文化などに関心のない世代の人たち、そして次世代を担う後継者（子供たち）にも届くような情報発信のあり方を検討していくことも重要な課題と言える。

注

- 1) 令和元年度【学園研究費助成金〈B〉】研究成果報告書 https://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/news/assets/docs/gakuenken_B_2019_21.pdf
令和3年度【学園研究費助成金〈B〉】研究成果報告書 https://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/gakuenken_B_2021_18.pdf〈最終アクセス日2022年10月23日〉
- 2) 「地域とともにつくる地方仏の映像アーカイブとその普及・活用に関する研究」共著 2020年3月『椋山女学

- 園大学研究論集』第51号 社会科学篇, pp. 39-56。
- 3) 愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 文化財2 絵画』（愛知県、平成23年3月）、pp. 126-127。
- 4) 令和元年5月17日報道発表「妙興寺所蔵・国指定重要文化財 絹本着色仏涅槃図」の公開のお知らせ <https://www.city.ichinomiya.aichi.jp/shisei/houdouhappyo/1011115/1027329/1028952/1029386.html>〈最終アクセス日2022年10月23日〉
- 5) 妙興寺での調査撮影は2020年2月10日に行った。調査には来薰院住職・平松良順氏の協力を頂き、仏像及び墨蹟の撮影は山木田時夫氏（アイランドスタジオ）に依頼した。
- 6) 『聖徳太子 時空をつなぐものがたり』（中之島香雪美術館、2020年）、p. 139、p. 196参照。
- 7) 『特別展 妙興寺展』（一宮市博物館、平成26年）pp. 83-84。
- 8) 大日如来坐像～蟹江町・龍照院～ <https://youtu.be/591UYw1cnBc>〈最終アクセス日2022年10月23日〉
- 9) 「地域文化・仏像バーチャルミュージアム」 <https://bjvm.ci.sugiyama-u.ac.jp>〈最終アクセス日2022年10月23日〉
- 10) 『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像銘記篇第四巻』（中央公論美術出版、昭和42年）、『愛知県史 別編 彫刻』（愛知県、平成25年）。また、映像が公表されているものでは、『TV見仏記9 岐阜／名古屋編』（ジュネオンエンタテインメント株式会社、2007年）がある。
- 11) 名古屋市内の仏像では、七寺（中区）の木造観音菩薩・勢至菩薩坐像、観聴寺（熱田区）の鉄造地藏菩薩立像、栄国寺（中区）の木造阿弥陀如来坐像、同・釈迦如来立像、同・阿弥陀如来坐像（半跏踏み下げ像）、雲心寺（熱田区）の木造阿弥陀如来坐像、願成寺（中村区）の木造金剛力士立像について映像記録を制作・公開している。
- 12) 仏像シリーズ 名古屋・興正寺の大日如来坐像 <https://youtu.be/v332WkTavsY>〈最終アクセス日2022年10月23日〉
- 13) 過去の調査や写真などは諸々の権利などから取り扱いが難しい部分があり、誰もが閲覧利用できる形にすることは難しく、また世代交代の中でそうした資料をどの程度、次世代の職員に引き継いでいるかも差があるように思われるが、個人的には調査に関わった作品に関しては、所蔵者や地域の博物館や文化財担当部署が必要に応じて自由に活用できるような情報（基礎データ及び画像データ、映像記録）を提供し、将来的により多くの人たちが利用できる形での成果報告を行いたいと考えている。



【図版1】 妙興寺所蔵・仏涅槃図



【図版2】 厨子入り観音菩薩立像（髻観音）全体



【図版3】 観音菩薩立像（正面）



【図版4】 同（右斜側面）



【図版5】 同（左斜側面）



【図版6】 釈迦誕生仏（正面）



【図版7】 同（背面）



【図版8】 同（像底）



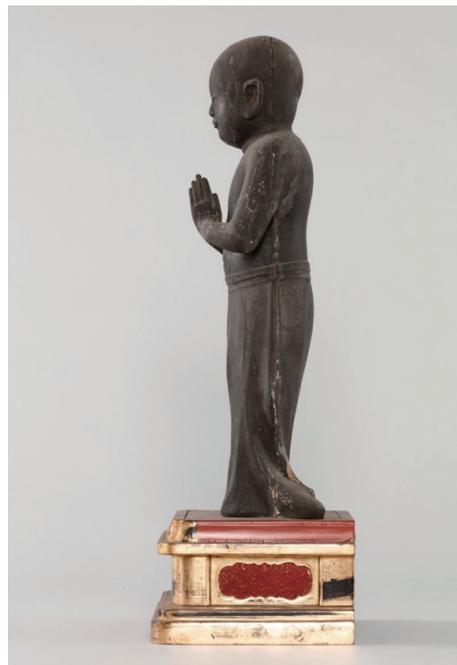
【図版9】 南無仏太子立像（正面）



【図版10】 同（背面）



【図版11】 同（右側面）



【図版12】 同（左側面）



【図版13】 布袋和尚坐像（正面）



【図版14】 同（斜側面）



【図版15】 同（右側面）



【図版16】 同（左側面）



【図版17】 同（背面）



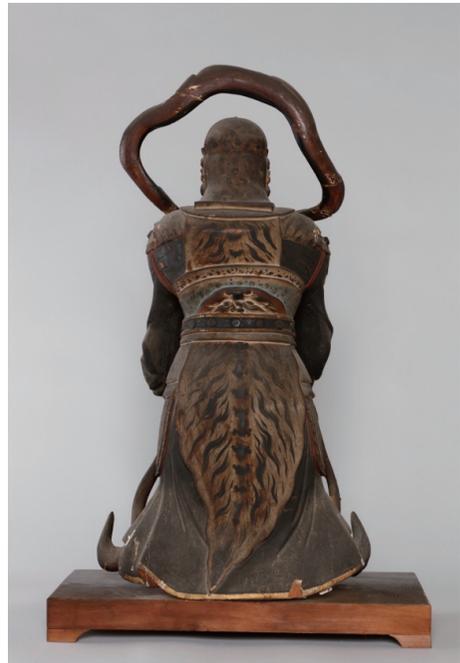
【図版18】 同（像底）



【図版19】 台座裏面の墨書銘



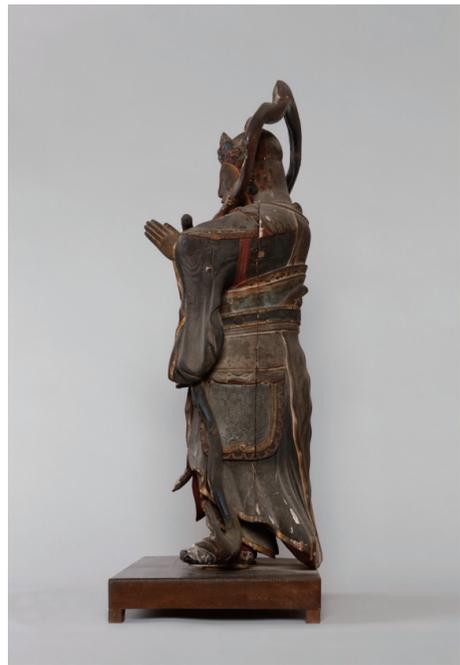
【図版20】 韋駄天立像（正面）



【図版21】 同（背面）



【図版22】 同（右側面）



【図版23】 同（左側面）



【図版24】 同（斜側面）



【図版25】 同（像底）